

グローバル文化学に関心のある学生はどのような学生か？

加賀美常美代・箕浦康子・三浦徹・篠塚英子

What Kind of Students Are They?

— The Case of Students Interested in Global Studies —

KAGAMI Tomiyo MINOURA Yasuko MIURA Toru SHINOTSUKA Eiko

Abstract

The purpose of this study is to investigate characteristics of undergraduate students who have an interest in global studies, and the relationship between their level of interest and related factors such as motivation of programs of global education and career support; ideal self image; multicultural attitude; career aspirations; the image of Muslim, Korean, and Japanese society and so on. An analysis was undertaken of questionnaires completed by 498 respondents, freshmen in the undergraduate school of Ochanomizu University. The total respondents were divided into 3 groups, those with a high level of interest in global studies (n=141), those with a middle level of interest (n=224), and those with low-level interest (n=126). The results of the analysis are as follows: 1) Students with high interest tend to have aspiration to attend programs of global education; 2) In terms of ideal self image, they have a tendency to place emphasis on specialty, curiosity, social contribution, intercultural exchange, appeal to society, social power, and so on; 3) As for multicultural attitude, they tend to put a stress upon respects for other cultures, a sense of community, importance of language and culture learning, withholding judgment, active listening, collaboration; 4) They tend to have aspiration to get a job of international organization; 5) Regarding Muslim society, they have positive images as a whole. In conclusion, it is recognized that students with a high level of interest in global studies tend to have expectations for high quality education, and clear images for their career.

Key word : global studies, ideal self image, multicultural attitude, career aspirations, image of Muslim, Korean, and Japanese society

I 問題の所在と研究目的

昨今の急速なグローバル化の中で、国際協力や多文化交流は21世紀の世界的な課題である。お茶の水女子大学（以下、お茶大と略す）では、これまで留学生と日本人学生の交流を推進するとともに、開発途上国の教育を協力する体制を構築するよう努めてきた。2005年度からは、国際教育センター、語学センター、開発途上国女子教育協力センター（注1）の協力の下で、国内外を問わず国際分野で働く人材の育成をめざし、国際協力教育のプログラムが文部科学省の特別研究教育経費を得てスタートした。また、文教育学部には学部共通の進学コースとして「グローバル文化学環」が誕生し、その授業科目は全学生が副専攻として受講できるようになった（注2）。

さて、本調査は、2005年4月に入学した全学部新入生を対象に、入学時点で国際協力や多文化交流の分野への新入生の関心を知り、「グローバル文化学環」の今後の新しいカリキュラムづくり、授業運営の参考とすることを目的として行われた（注3）。本稿では、特に、①新入生がお茶大のどのような国際教育・キャリア育成プログラムに関心を持っているか、②グローバル文化学への教育内容の関心の度合いが、国際教育・キャリア育成プログラム（研修や企画行事）への参加意欲、自己認識（理想的自己観や将来のキャリア志向）、多文化理解態度や社会に対するイメージにどのように関連するか検討することを目的とする。本調査の分析枠組みは以下のとおりである（図1）。

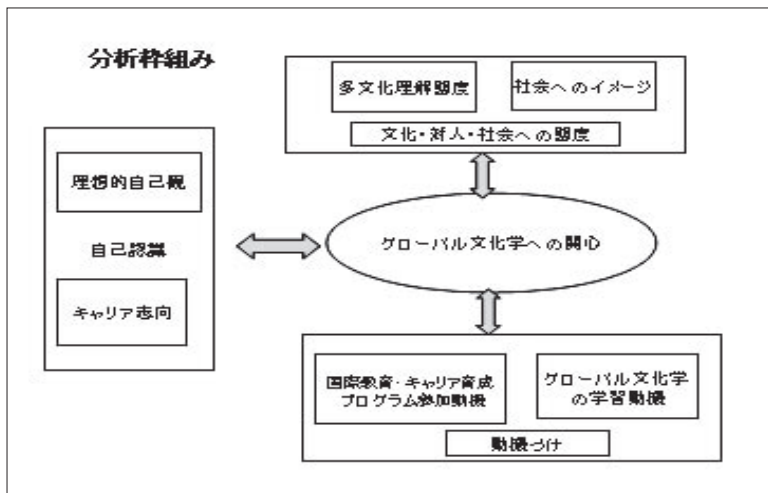


図1 分析枠組み

II 方法

1. 本研究に関連する尺度、質問項目の準備

本研究に関連する項目は、第一に、国際教育プログラムへの学習意欲及び参加意欲に関するものである。まず国際教育・多文化交流に関する学習意欲を問う質問に対しては、「いろいろな国の学生と友だちになりたい」、「さまざまな国、社会、文化、そこに住む人々の考えを理解したい」、「自分の国・地域の文化や

自分自身をみつめたい」、「環境・貧困など地球規模で起こる問題を総合的に理解したい」、「他国の人々と留学生に自分の考えや自国（日本）のことを話したい」、「国際協力に必要な知識や技能を学びたい」、「外国語で自由に討論できるようになりたい」、「世界各地の料理を作ったり、民族衣装を着たり、音楽・舞踊を実演してみたい」という8項目を作成した。これらは、「最も当てはまる(5)」から「最もあてはまらない(1)」の5件法による評定を採用した。

次に、お茶大の国際教育・キャリア育成プログラムへの参加意欲を問う質問に対しては、現在、お茶大で参加可能な「留学生との日常的な交流やサポート活動」、「アフガニスタン女子教育支援プログラムの講演会参加・募金活動」、「海外語学研修」、「私費による開発途上国への研修旅行」、「日韓交流セミナー」、「留学生との交流合宿」、「協定校への交換留学（英国、中国、韓国、オーストラリアなど）」、「私費による語学留学」の8項目を挙げた。これらは、「参加してみたい(3)」、「検討してみたい(2)」、「関心がない(1)」の3件法による測定をした。

第二の項目は、「どのような人が理想的な人か」という理想的自己観に関するものである。教育価値観（加賀美,2004）で収集した理想的教師観、理想的学生観、理想的教育観の3領域の個別12次元を代表する項目を参考に、理想的自己観に関する項目を次のとおり作成した。「専門知識が豊富で視野が広い人」、「正義感が強い人」、「上下の区別なく対等な立場で人と接することができる人」、「社会的に力のある人」、「好奇心が旺盛で向上心がある人」、「人の意見に素直に合わせられる人」、「社会の常識や規律を重視する人」、「社会や人のために役に立つ人」、「異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人」、「自分で判断し行動する人」、「人と社会に関するメッセージが伝えられる人」、「規則に縛られず自由な生き方ができる人」の12項目である。これらは、「最も当てはまる(5)」から「最もあてはまらない(1)」の5件法による評定を採用した。

第三は、多文化社会において人々がともに活動を行う際に必要な態度を問う質問項目である。測定のための項目選定については、接触効果研究（加賀美,2003）で用いた多文化理解態度27項目（Allport, 1954; Pettigru, 1998; Ruben, 1976, Bhawuk&Brislin, 1992；大淵, 1997；山岸, 1997；八代・荒木, 2002 など）から選抜した14個の質問項目を採用した。「もしあなたが様々な国の人と一緒に仕事をするとしたら、どのようなことが重要だと思いますか。」という質問に対して、「文化、価値観、考えの違いを当然だと受け止められる（多様性）」、「異なる文化のもとでは相手の文化の価値観を尊重し合わせられる（相手文化尊重）」、「意見の違いがある時、賛成か反対かの判断をいったん保留することができる（判断保留）」、「年齢や職位の上下関係にはあまりとらわれない（対等性）」、「いろいろな価値観があっても、行動基準の判断に「公正」を第一に置いたほうがよい（公正）」、「共同体としての世界や地球という視点でものごとが考えられる（地球共同体意識）」、「人間関係が上手くいかなかった時でも、感情的にならず冷静に対応できる（冷静）」、「反対の意見でも相手の意見を最後まで聞ける（積極的傾聴）」、「誤解が生じ失敗をしても、冗談を言ったり笑ったりすることができる（冗談）」、「自国のなじみ深い伝統や文化を尊重する（自文化尊重）」、「考え方の違う人々の間でもリーダーシップをとり、企画を進めていける（企画力）」、「意見の違いがある時、自分と相手の考えの妥協点を探ることができる（妥協）」、「いろいろな言語や文化を学ぶことを重視する（言語文化学習重視）」、「共通の目標に向かって協力して問題解決ができる（問題解決）」の14項目を作成した。これらは、「最も当てはまる(5)」から「最もあてはまらない(1)」の5件法による評定を採用した。

第四は、理想的キャリア志向（以下、キャリア志向とする）を示す16項目で、「30歳代前半（30歳か

ら 35 歳)の自分の姿を思い描いて、そうありたい自分に該当する項目に○をつけなさい。」という質問に対して、「企業で総合職(男女差なし)として働く」、「企業で一般事務職として働く」、「企業でプログラマーなど専門技術職として働く」、「外資系や国際的企業の海外関係部門で働く」、「開発途上国支援を主な業務とする組織の職員(NGOやJICA職員、又は現地での支援活動など)として働く」、「国連などの国際的組織の職員(修士号が必要)として働く」、「芸術や芸能の分野で活躍する」、「大学や研究所などで研究に従事する」、「幼小中高または専門学校で教員として働く」、「国家公務員・地方公務員として働く」、「海外の大学院へ留学している」、「ボランティアとして国際・地域貢献をしている」、「自分で起業している」、「上記に該当しない仕事を海外でやっている」、「パート・アルバイト・フリーター・派遣社員として働く」の16項目を採用した(箕浦,2005)。これらは、「強く希望する(3)」、「可能であればそうになりたい(2)」、「関心がない(1)」の3件法による評定を採用した。

第五は、イスラム社会、韓国社会、日本社会についてのイメージを問うもので、イスラム社会、韓国社会、日本社会のイメージについて10項目の対になる形容詞による項目を作成した(岩男・萩原,1988など)。「先進的-後進的」、「規則を厳格に適用する-規則を柔軟に解釈する」、「集団の結束力が強い-集団の結束力が弱い」、「親しみにくい-親しみやすい」、「自由な-不自由な」、「穏やかな-攻撃的な」、「理解しにくい-理解しやすい」、「あたたかい-冷たい」、「男女平等な-男女不平等な」、「変化しやすい-変化しにくい」である。これらは、「どちらももいえない」を中間に、両極に「非常に当てはまる」、「やや当てはまる」という評定を採用した。

2. 質問紙調査実施

質問票は2005年度に入学した全ての新生を対象に入学ガイダンスのときに質問票を配布、その場で回収した。498名のうち496名から有効な回答を得た。質問票には、調査目的が新生の国際協力や多文化交流の意識を知り、国際理解教育及びグローバル文化学環のカリキュラムや授業運営の参考にするためであることを示した。また、プライバシーの厳守も明記した。

3. 参加者

参加者の年齢は平均18.4歳で、18歳(74.7%)、19歳(20.3%)、20歳(2.4%)、21歳以上(2.0%)無回答(0.6%)であった。学生区分については、日本で教育を受けた学生(98.2)、留学生(1.4)、無回答(0.4)であった。出身校の種別は、国公立高校(66.3%)、私立高校(31.7%)、外国校(0.8%)、その他(0.2%)、無回答(1.0%)であった。出身校の共学・別学の種別については、男女共学校(72.1%)、女子高(27.5%)、無回答(0.4%)であった。出身校の所在する地域は、関東地方(52.6%)、関東以外の日本(44.8%)、海外(1.8%)、無回答(0.8%)であった。現在の住まいは、自宅(45.6%)、寮(21.3%)、一人住まい(24.9%)であった。

Ⅲ 結果

1. グローバル文化学の学部別関心度

グローバル文化学の教育内容に関する関心度については、「グローバル文化学環の教育内容に関心がありますか?」という質問の回答者を学部別に分け、平均値を算出したところ、文教育学部の学生 (n=225) の平均値が3.42で最も高く、次いで、生活科学部の学生 (n=134) 3.02、理学部の学生 (n=137) の順であった (M=2.79)。

2. グローバル文化学環でどのようなことを学びたいか

2-1 学部別

グローバル文化学に関連する学習動機8項目の平均値を学部ごとに高い順にグラフに表したところ、図2のように、文教育学部の学生が最も高く、ついで、生活科学部、理学部の学生の順となった。学生たちが回答した項目の中で最も高かったのは、「外国語で討論ができるようになりたい」というもので、ついで、「さまざまな国、社会文化、そこに住む人の考えを理解したい」、「自分の国・地域の文化や自分自身を見つめたい」、「いろいろな国の学生と友達になりたい」の順であった。最も低かった項目は、「他国の人々や留学生に自分の考えや自国のことを話したい」というものであった。

このように、学生は「外国語で自由に討論したい」と最も高く回答しており、語学学習の習熟意欲が高いものの、「他国の人々や留学生に自分の考えや自国のことを話したい」という点については、最も低く回答しており、外国語を自由に話せるという漠然としたあこがれと現実的にどのような内容を話し発信していくかという点についてはギャップが生じている (図2)。

2-2 関心度別のグローバル文化学に関連する学習動機

グローバル文化学の教育内容の関心度を測定するために、「グローバル文化学環の教育内容に関心がありますか?」という質問の回答者を次のとおり、3群に分けた。まずグローバル文化学の教育内容に「非常に関心がある」、「かなり関心がある」という回答者を「関心高群」(n=141)に、「少し関心がある」回答者を「関心中群」(n=224)に、「あまり関心がない」、「全く関心がない」という回答者を「関心低群」(n=126)に分けた。

グローバル文化学の学習動機について、3群別に平均値の差を求める一元配置分散分析を行ったところ、図3のとおり、すべての項目について「関心低群」より「関心高群」のほうがグローバル文化学に関する学習動機が高く、有意差が認められた ($p < .01$)。

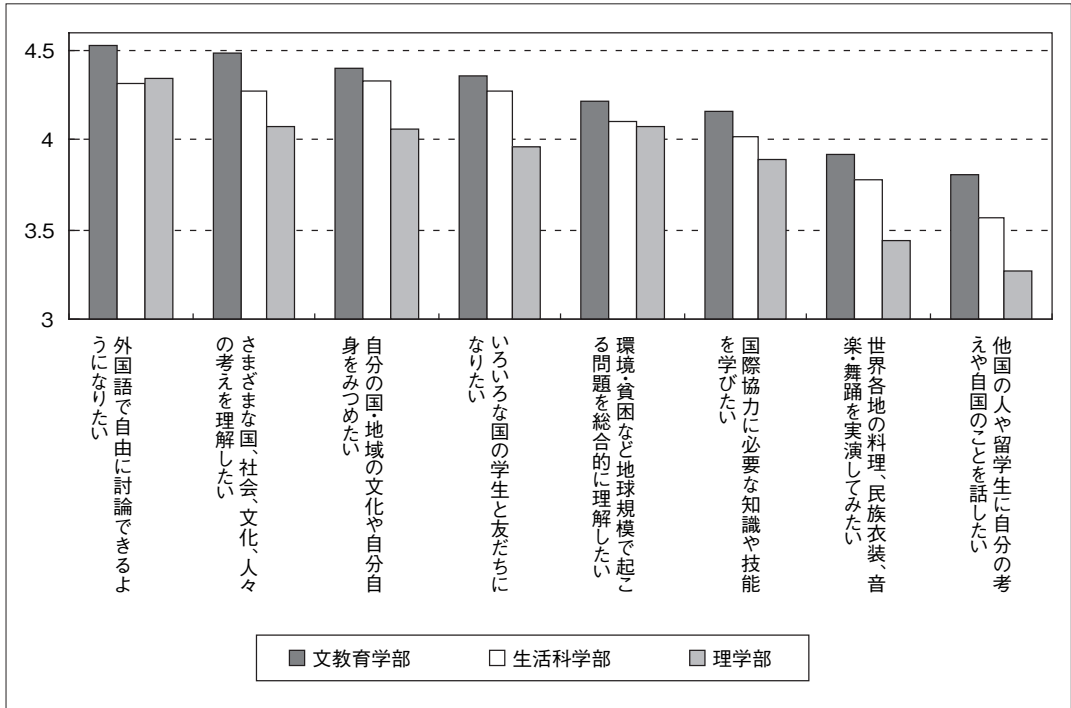


図2 学部別のグローバル文化学に関連する学習動機

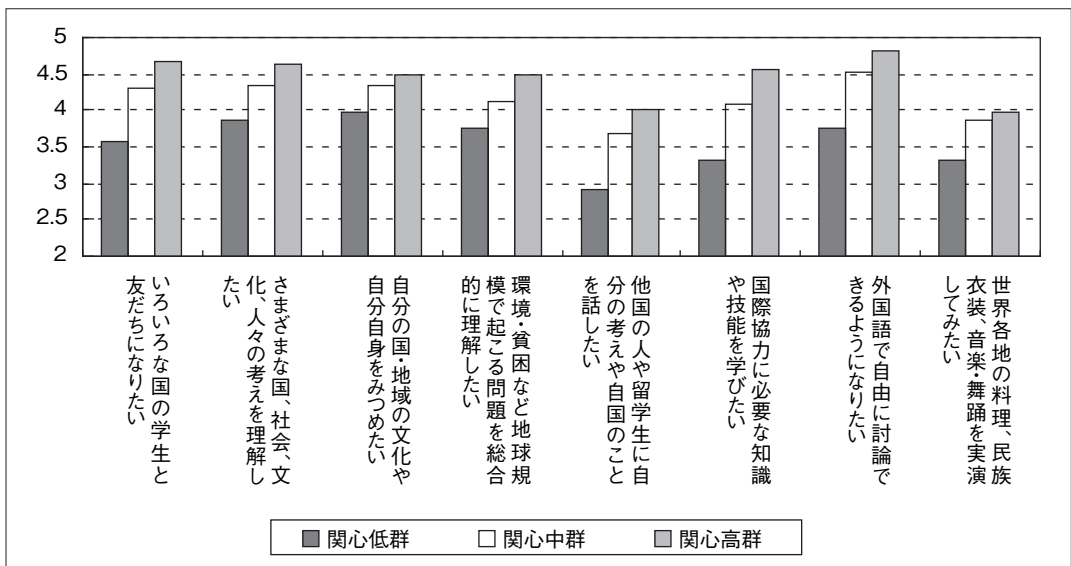


図3 関心度別のグローバル文化学に関連する学習動機

3. お茶大の国際教育・キャリア育成プログラムへの参加動機

3-1 学部別

図4のとおり、国際教育・キャリアプログラム（企画行事や教育支援活動など）への参加意欲について、それぞれの項目の平均値を学部ごとにグラフに表したところ、学部別には、日韓大学セミナー以外のどの項目も文教育学部の学生が最も高い参加意欲を示し、次いで生活科学部、理学部という順であった（ $p < .01$ ）。上位を占めたのは、「海外語学研修」、「留学生との日常的な交流やサポート活動」、「協定校への交換留学」、留学生との交流合宿であった。このことは、大学が提供する比較的リスクの少ないタイプの海外留学や語学研修プログラムを選択する傾向を示すものである。また、キャンパス内での留学生との交流や支援活動への参加も期待しており、国内外において大学の責任で提供する国際教育・多文化交流プログラムに関心が高いことが伺える。

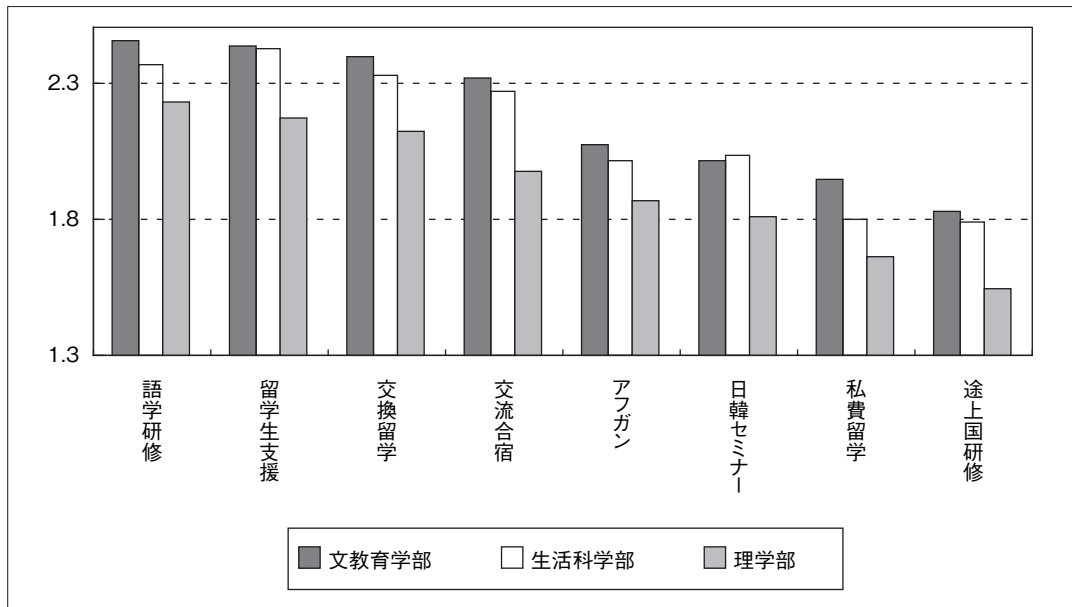


図4 国際教育・キャリア育成プログラムへの参加動機

3-2 因子分析

さらに、国際教育・キャリアプログラム（企画行事や教育支援活動など）の参加する意欲に関する8項目を因子分析（主成分分析、バリマックス回転）をしたところ、2因子が抽出された（表1）。因子Ⅰは「協定校への交換留学」、「海外語学研修」、「私費による語学留学」、「途上国への研修旅行」の項目から成り、因子負荷量が0.5以上であった。これらはいずれも海外での研修を示すので、このことから「海外型」と命名した。一方、因子Ⅱは、「留学生との日常的な交流やサポート活動」、「アフガニスタンプログラムの講演参加」、「日韓交流セミナー」、「留学生と日本人学生との交流合宿」の項目から構成され、いず

れも因子負荷量が0.59以上であった。このことからこの因子を「交流型」と命名した。この中で、留学生との日常的な交流やサポート活動や留学生との交流合宿の2項目は、因子Iと因子IIとも0.5以上の高い因子負荷量であったが、内容的には交流活動を意味するので「交流型」に入れた。これらの因子について、項目の内的一貫性は α 係数を求めたところ、海外型は $\alpha = .86$ 、交流型は $\alpha = .78$ ではほぼ信頼性が支持されている。

表1 国際教育・キャリア育成プログラム参加動機因子分析

項目	因子名	因子	
		I	II
協定校への交換留学（英国、中国、韓国、オーストラリアなど）	海外型	0.89	0.18
海外語学研修		0.87	0.17
私費による語学留学		0.82	0.17
私費による開発途上国への研修旅行		0.56	0.47
留学生との日常的な交流やサポート活動	交流型	0.54	0.53
アフガニスタン女子教育支援プログラムの講演会参加・募金活動		0.08	0.83
日韓交流セミナー		0.18	0.79
留学生との交流合宿		0.54	0.60
寄与		3.15	2.27

3-3 学部別

国際教育・キャリア育成プログラムについて「交流型」と「海外型」の平均値を算出し、学部別に比較すると、図5のように示された。学部別には文教育学部の学生の参加意欲が最も高く、ついで生活科学部、理学部の学生の順となった。さらに、「海外型」より「交流型」を選択する学生のほうが参加意欲の高い傾向が見られた ($p < .01$)。これは「交流型」のプログラムのほうが日本で行われるので、より身近であり接近しやすいこと、海外渡航への不安・リスクや経済的負担が少ないと感じたためではないかと考えられる。

3-4 関心度別

また、関心度別に海外型、交流型のそれぞれのプログラムについて3群間の平均の差を検定する一元配置分散分析を行ったところ、図6のとおり、「関心高群」は、「関心中群」、「関心低群」より、「海外型」、「交流型」プログラムの両方に参加意欲が高いことが認められた ($p < .01$)。このことは、詳しく面接調査をする必要があるが、「関心高群」は国内外両方のグローバル化や国際交流に目が向いているため、両方を経験したいと思うのではないかと考えられる。一方、「関心低群」、「関心中群」については、ある程度の語学学習や準備が必要でリスクの伴う「海外型」よりは、身近な「交流型」のほうが接近しやすいと考えているためではないかと推察できる。

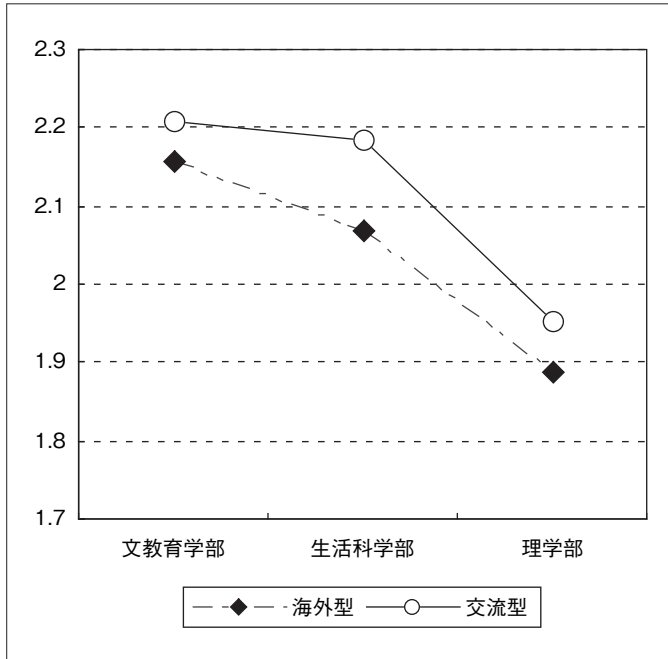


図5 学部別の国際教育・キャリア育成プログラムへの参加動機

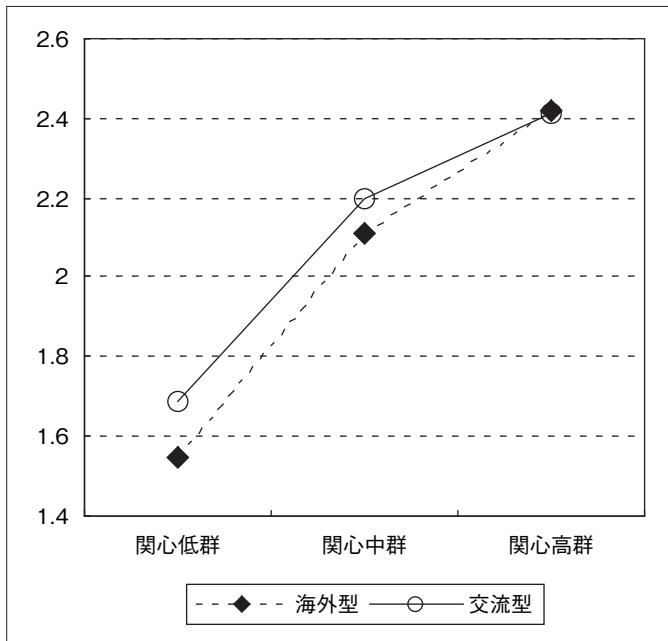


図6 関心度別の国際教育・キャリア育成プログラムへの参加意図

4. 理想的自己観

4-1 全体の平均値

図7のとおり、新入生は、最も理想的だと思う人の上位3項目を、「好奇心が旺盛で向上心がある人」、「専門知識が豊富で視野が広い人」、「自分で判断し行動する人」と回答しており、下位3項目は「人の意見に素直に合わせられる人」、「社会の常識や規律を重視する人」、「社会的に力のある人」であった。

さらに、12項目の中で自分の最も大切だと思う項目はどれかという質問に対して、「好奇心が旺盛で向上心がある人」(19.7%)、「自分で判断し行動する人」(19.3%)と回答しており、ほぼ整合した回答となっている。このように、新入生は、全体として理想的な自己について、好奇心が強く、専門的知識や広い視野、自分で判断し行動することを重視する独立し、自律した理想的自己像が強い傾向が示された。一方、人の意見への同調、規範の遵守については自己の理想像として思い描いていない傾向が見られた。

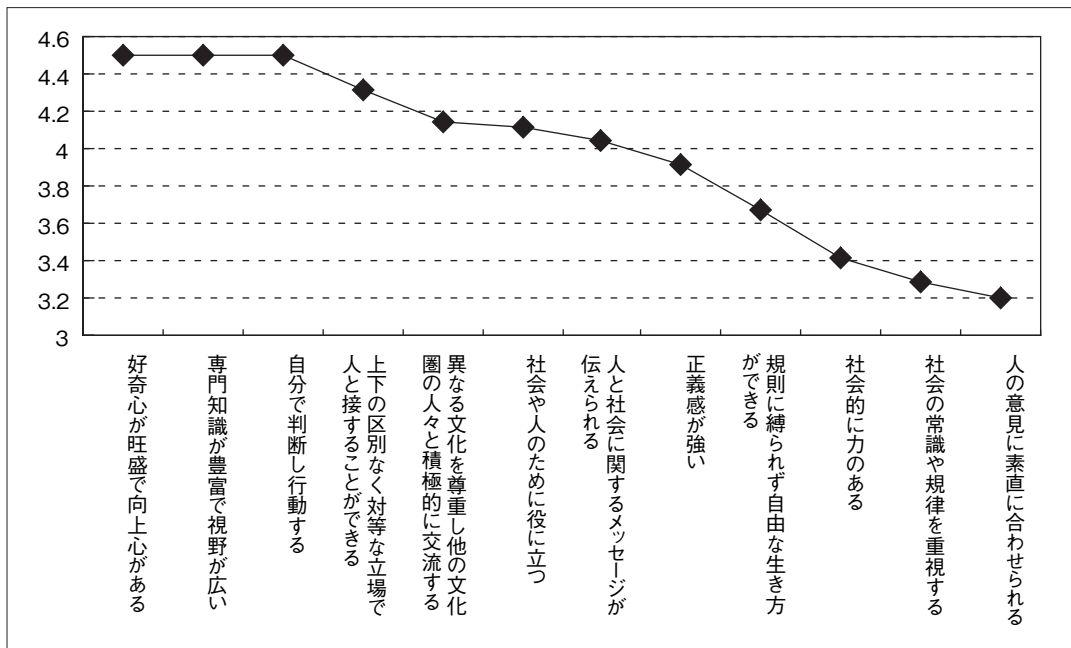


図7 理想的自己観の平均値

4-2 関心度別

次に、関心度別に理想的自己観の違いを見るために3群の平均値の差を検定する一元配置分散分析を行った(表2)。「関心高群」の平均値が「関心中群」、「関心低群」より高い傾向が見られたが、有意差が認められた項目は、「専門知識が豊富で視野が広い人」、「好奇心が旺盛で向上心がある人」、「社会や人のために役に立つ人」、「異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人」、「人と社会に関する

メッセージが伝えられる人」であった ($p < .01$)。「社会的に力のある人」も有意傾向が認められた ($p < .10$)。

このように、グローバル文化への関心度の高い人は、相対的に好奇心があり、専門性や異文化間交流を求め、社会へ貢献し、社会への発信力をもつことを理想の自己像として思い描いている傾向が認められた。

表2 関心度による理想的自己観の各項目の平均値の比較

	関心低群 n=126	関心中群 n=225	関心高群 n=140	F 値
専門知識が豊富で視野が広い人	4.41	4.47	4.62	3.64*
正義感が強い人	3.90	3.89	3.95	0.19
上下の区別なく対等な立場で人と接することができる人	4.29	4.28	4.38	0.68
社会的に力のある人	3.28	3.40	3.55	2.73+
好奇心が旺盛で向上心がある人	4.29	4.56	4.60	8.44**
人の意見に素直に合わせられる人	3.08	3.26	3.23	1.45
社会の常識や規律を重視する人	3.36	3.21	3.33	1.05
社会や人のために役に立つ人	3.95	4.09	4.26	4.37
異なる文化を尊重し他の文化圏の人々と積極的に交流する人	3.71	4.16	4.49	31.11**
自分で判断し行動する人	4.40	4.51	4.53	1.37
人と社会に関するメッセージが伝えられる人	3.75	4.08	4.23	10.84**
規則に縛られず自由な生き方ができる人	3.54	3.76	3.66	2.04

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

5. 多文化理解態度の重要度

5-1 全体の平均値

多文化理解態度については、全体的に平均値が高くどの項目も重要だと認識していたことが示された。新入生が非常に重要だと思う上位4項目は、「反対の意見でも相手の意見を最後まで聞ける（積極的傾聴）」、「共通の目標に向かって協力して問題解決ができる（問題解決）」、「文化、価値観、考えの違いを当然だと受け止められる（多様性）」、「人間関係が上手くいかなかったときでも、感情的にならずに冷静に対処できる（柔軟性）」を挙げていた（図8）。

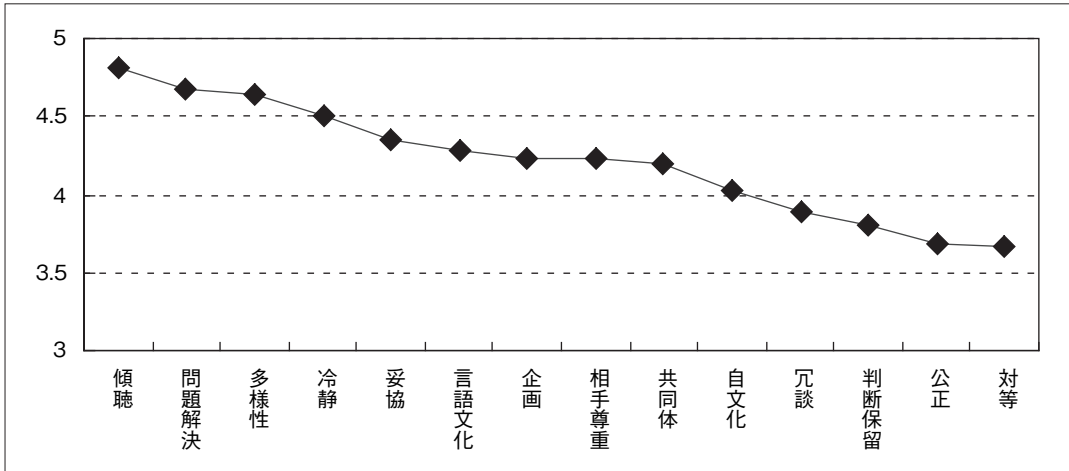


図8 多文化理解態度の平均値

5-2 関心度別

関心度別に多文化理解態度の違いを見るために3群の平均値の差を検定する一元配置分散分析を行ったところ、表3のとおり「異なる文化のもとでは相手の文化の価値観を尊重し合わせられる（相手文化尊重）」、「意見の違いがある時、賛成・反対の判断を保留することができる（判断保留）」、「共同体としての世界や地球という視点でものごとが考えられる（地球共同体意識）」、「いろいろな言語や文化を学ぶことを重視する（言語文化学習重視）」、「共通の目標に向かって協力して問題解決ができる（問題解決）」という項目については、「関心高群」のほうが「関心低群」、「関心中群」より高い傾向が見られた（ $p < .01$ ）。「反対の意見でも相手の意見を最後まで聞ける（積極的傾聴）」は有意傾向が認められた（ $p < .10$ ）。

このように、「関心高群」はグローバル社会の中で、言語や文化の学習を重視しつつ、相手との関係性や協働での問題解決能力、共同体としての意識など高度なコミュニケーション能力と多文化理解態度を強く意識化している傾向が見られた。

表3 関心度による多文化理解態度の各項目の平均値の比較

	関心低群	関心中群	関心高群	F 値
	n=126	n=225	n=140	
文化、価値観、考えの違いを当然だと受け止められる	4.59	4.67	4.62	0.79
異なる文化のもとでは相手の文化の価値観を尊重し合わせられる	4.06	4.27	4.27	3.00*
意見の違いがある時、賛成・反対の判断を保留することができる	3.65	3.83	3.91	3.13*
年齢や職位の上下関係にはあまりとらわれない	3.64	3.66	3.69	0.09
多様な価値観があっても行動基準の判断に「公正」を第一に置く	3.67	3.72	3.64	0.38
共同体としての世界や地球という視点でものごとが考えられる	3.81	4.23	4.46	24.39**
人間関係が上手くいかない時、感情的にならず冷静に対応できる	4.39	4.51	4.56	2.11
反対の意見でも相手の意見を最後まで聞ける	4.73	4.82	4.84	2.36+
誤解が生じ失敗しても、冗談を言ったり笑ったりできる	3.79	3.96	3.87	1.53
自国のなじみ深い伝統や文化を尊重する	3.96	3.98	4.11	1.35
考え方の違う人々の間でもリーダーシップをとり企画を進める	4.14	4.23	4.28	1.17
意見の違いがある時、自分と相手の妥協点を探ることができる	4.24	4.39	4.39	2.02
いろいろな言語や文化を学ぶことを重視する。	3.95	4.36	4.43	16.75**
共通の目標に向かって協力して問題解決ができる	4.52	4.69	4.74	5.65**

** p<.01, * p<.05, + p<.10

6. 将来のキャリア志向

6-1 因子分析

将来のキャリア意識 16 項目について、表4のとおり、因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行ったところ、どの因子も 0.3 以上の負荷量があり、内容的に意味のある 5 つの因子が抽出された。因子Ⅰは、開発途上国や国連など海外の国際組織で働くことを示す因子で、「国際型」と命名した。因子Ⅱは、企業で総合職や専門職で働くことを示す因子で、「企業型」と命名した。因子Ⅲは、芸術や起業、海外での自由な仕事を示す因子で、「自由型」と命名した。因子Ⅳは、公務員や学校教員を示す因子で、「公職型」と命名した。因子Ⅴは、企業の一般職や専業主婦、フリーターを示す因子で、「一般型」と命名した。なお、因子Ⅳを示す「国家公務員・地方公務員として働く」という項目は、「企業型」のところにも .3 以上の因子負荷量があったが、ここでは、公共的な職業の意味合いを重視して「公職型」の因子Ⅳに含めた。

表4 将来のキャリア意識の因子分析

項 目	因子名	因子				
		I	II	III	IV	V
開発途上国支援を主な業務とする組織の職員として働く	国際型	0.87	-0.02	-0.05	-0.04	0.04
国連などの国際的組織の職員として働く		0.80	0.15	-0.03	0.11	-0.10
ボランティアとして国際・地域貢献をしている		0.74	-0.10	-0.01	0.02	0.08
外資系や国際的企業の海外関係部門で働く		0.58	0.51	0.17	-0.09	-0.11
海外の大学院へ留学している		0.47	0.06	0.44	0.31	-0.22

企業で総合職（男女差なし）として働く 企業でプログラマーなど専門技術職として働く	企業型	0.09 -0.08	0.79 0.67	0.05 0.13	-0.14 0.15	0.05 -0.18
芸術や芸能の分野で活躍する 上記に該当しない仕事を海外でやっている 自分で起業している	自由型	-0.12 0.40 0.00	-0.07 0.20 0.15	0.61 0.61 0.61	0.12 -0.08 -0.05	0.06 0.00 0.02
国家公務員・地方公務員として働く 大学や研究所などで研究に従事する 幼小中高または専門学校で教員として働く	公職型	0.19 0.06 -0.02	0.36 0.01 -0.02	-0.37 0.20 -0.15	0.31 0.76 0.72	0.12 -0.15 0.22
パート・アルバイト・フリーター・派遣社員として働く 専業主婦をしている 企業で一般事務職として働く	一般型	0.11 -0.14 0.01	-0.02 -0.10 0.49	0.20 -0.13 -0.02	0.02 0.03 0.02	0.68 0.61 0.51
寄与		2.77	1.81	1.61	1.38	1.30

6-2 関心度別

6-1で抽出された5因子が示すとおり、「国際型」、「企業型」、「自由型」、「公職型」、「一般型」の5つのキャリア志向類型が見出されたが、ここでは、関心度別に5つのキャリア類型の一元配置分散分析を行ったところ（表5）、「関心高群」のほうが「関心低群」及び「関心中群」より「国際型」キャリア志向と「自由型」キャリア志向を選択している傾向が見られた（ $p < .01$ ）。このことから「関心高群」は、入学時から将来の国際型キャリアや海外に関係した自由な職業選択を目指していることが認められた。すなわち、お茶大の新入生たちで、グローバル文化学に関心を持つ学生たちは、将来の国際キャリア志向をかなり明確に意識し、グローバル文化学環を第一志望として選択している可能性があるのではないかと解釈できる。

表5 関心度によるキャリア志向類型の平均値の比較

	関心低群 n=126	関心中群 n=225	関心高群 n=140	F 値
国際型	1.22	1.49	1.94	97.15**
企業型	1.71	1.70	1.76	0.48
自由型	1.28	1.39	1.47	6.90**
公職型	1.73	1.76	1.72	0.32
一般型	1.28	1.22	1.23	1.41

** $p < .01$, * $p < .05$

一方、「関心低群」の学生は、相対的に国際型キャリアや海外に関係した自由な職業を選択しない傾向が見られた。すなわち、グローバル文化学の教育内容に関心が低いグループは、入学時に将来のキャリア志向が国際型キャリアや海外で自由な職業選択をする自由型ではない傾向が見られている。このことから関心が少ない学生は入学時にすでに国際型の進路選択の可能性があまりない傾向を示しているといえる。

7. 社会イメージ

7-1 3つの社会イメージ

日本社会、イスラム社会、韓国社会のイメージに対する評価については、10項目の対になる形容詞による項目を作成したが、「先進的」、「集団の結束力が強い」、「規則を柔軟に適用する」、「親しみやすい」、「自由な」、「穏やかな」、「理解しやすい」、「あたたかい」、「男女平等な」、「変化しやすい」のすべての項目を5段階評定（最も当てはまる(5)～全く当てはまらない(1)）に変換させて、平均値を算出したところ、図9のとおりになった。

3つの社会イメージを比較すると、3は「どちらともいえない」という中間の評定であるが、日本社会とイスラム社会はほぼ対極に位置されていることが示された。日本社会イメージのほうがイスラム社会イメージより、顕著に「先進的」、「親しみやすい」、「自由な」、「穏やかな」、「理解しやすい」、「男女平等な」、「変化しやすい」と認識している傾向が見られた。一方、イスラム社会のほうが「集団の結束力が強い」、「規則を厳格に適用する」と認識している傾向が見られた。韓国社会イメージについては、「先進的」、「集団の結束力が強い」、「規則を厳格に適用する」、「自由な」、「穏やかな」というイメージ項目において、イスラム社会と日本社会の中間に位置していた。

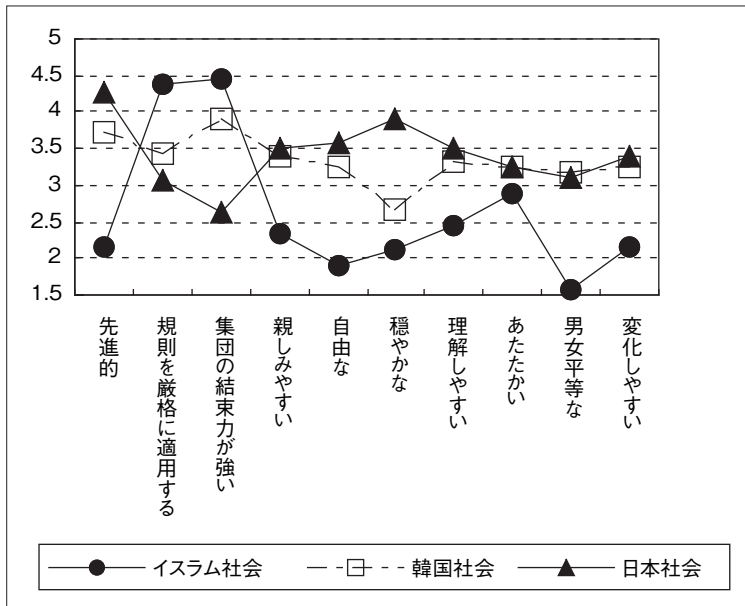


図9 3つの社会のイメージ

「どちらともいえない」という平均値3の評価を基準に、平均値が3以上を肯定的イメージ、3以下を否定的イメージの項目を分類すると、イスラム社会イメージは、「先進的」、「親しみやすい」、「自由な」、「穏やかな」、「理解しやすい」、「男女平等な」、「変化しやすい」の項目において、すべて否定的であった。

韓国社会イメージについては、「穏やかな」という項目についてのみ、否定的であったが、そのほかの

項目については、どちらともいえないという評価が多かった。

日本社会イメージについては、「集団の結束力が強い」という項目において、否定的であった。以上のよう、3つの社会イメージを示したが、新入生は多くの項目において日本社会とイスラム社会への対極的な認識をし、特に、先進性、親和性、平等性、柔軟性の点で違いが認められた。また、日本社会と韓国社会に対しても、先進性や集団の結束性、穏やかさという項目において違いを認識していた。

7-2 関心度別イスラム社会イメージ

次に、イスラム社会イメージの各項目を関心度別に平均値の差の検定を行った(図10)。その結果、「関心高群」のほうが「関心低群」より「規則を厳格に適用する」、「集団の結束力が強い」、「親しみやすい」、「理解しやすい」、「あたたかい」というように認識していることが示された($p < .05$)。このことは関心度の高い人のほうがイスラム社会を含め、多文化の社会規範に関する知識が豊富である可能性が高いため、関心度が低い人より、宗教的な規範意識や集団の結束を強く意識しているからではないかと考えられる。また、関心度の高い人は、多様な文化背景を持つ人々への理解も深く、イスラム社会の人々への関心も強いいため、より親近感を持っていると解釈できる。

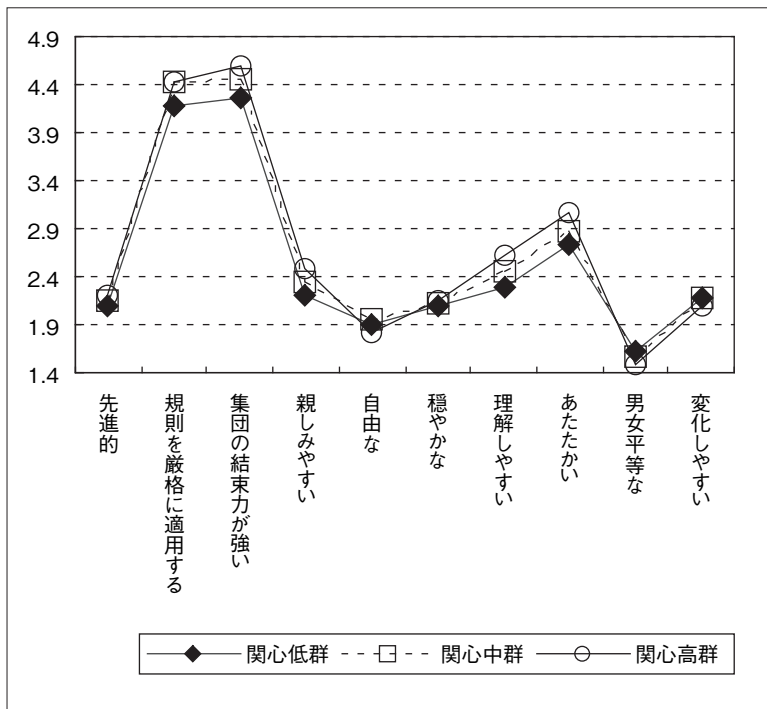


図10 関心度別イスラム社会イメージ

7-3 関心度別韓国社会イメージ

韓国社会イメージについては、関心中群が関心低群より「規則を厳格に適用する」という項目において有意差が認められた ($p < .05$)。他の項目は有意差が認められなかった (図 11)。

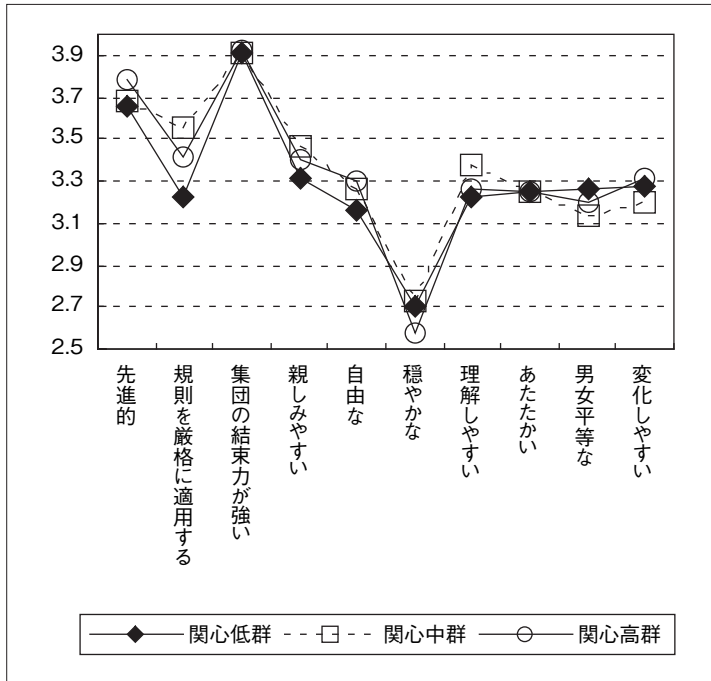


図 11 関心度別韓国社会イメージ

7-4 関心度別日本社会イメージ

日本社会イメージについては、図 12 のとおり、関心度とイメージ項目の間には有意差はなかった。全体として肯定的な傾向が見られたが、「集団の結束力が強い」という項目については、否定的な傾向が見られた。

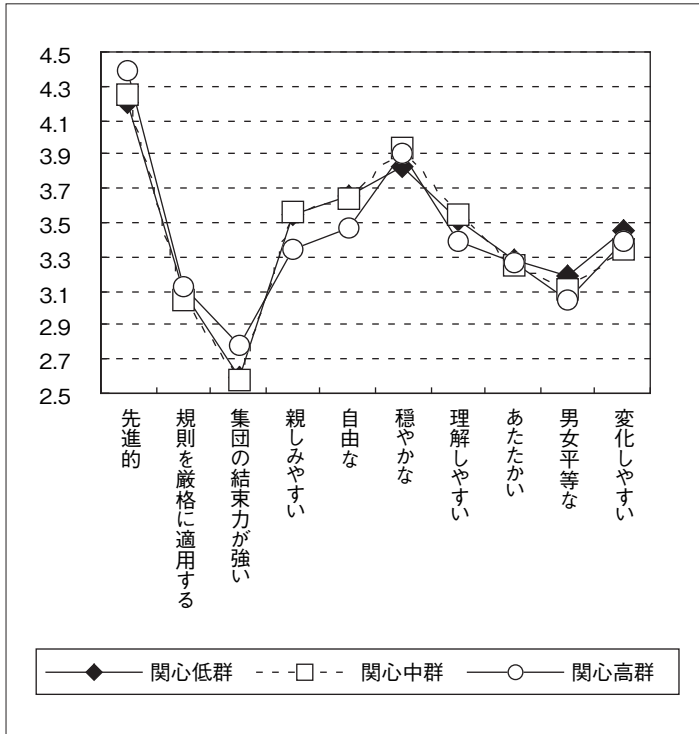


図 12 関心度別日本社会イメージ

IV 総合的考察と今後の課題

以上のように、グローバル文化学への関心度を分析軸にした新入生の国際意識調査の結果をまとめると、次のように要約できる。まず、第一に、学部別というと、文教育学部の学生は他の2学部よりグローバル文化学の教育内容に関心が高く、海外研修や留学生支援、多文化間交流、企画行事などの国際教育・キャリア育成プログラムへの参加意欲も高い傾向が見られた。

第二に、グローバル文化学に関する教育内容の関心の高い人は、グローバル文化学に関連する学習意欲も高い傾向が見られ、また、国際教育・キャリアプログラム（企画行事や教育支援活動）についても、海外型、交流型プログラムともに参加意欲が高い傾向が見られた。

第三に、理想的自己観については、グローバル文化学の関心が高い人は、専門性と視野の広さ、好奇心と向上心、社会貢献、異文化間交流、社会への発信力、社会的影響力を理想的自己として重視し思い描いている傾向が見られた。

第四に、多文化理解態度については、関心が高い人ほど、言語や文化の学習を重視しつつ、相手との関係性を重視する態度、協働での問題解決能力、共同体としての意識などを重視している傾向が見られた。

第五に、将来へのキャリア志向については、関心が高い人ほど開発途上国や国連など海外の国際組織で働くことを示す「国際型」キャリア、芸術や起業、海外での自由な仕事を示す「自由型」キャリアを目指していることが示された。

第六に、イスラム社会のステレオタイプのイメージについては、関心が高い人は「親しみやすい」、「理解しやすい」、「あたたかい」という親和性を肯定的に認識していた。また、「規則を厳格に適用する」、「集団の結束力が強い」というようにイスラム社会の集団の規範遵守をより強く認識している傾向が示された。

以上のように関心度に焦点を当てた分析結果から、グローバル文化学の教育内容への関心が高い学生は、かなり明確な国際的なキャリア意識を持ち、「海外型」、「交流型」の教育プログラムも積極的に参加し、学習意欲の高い集団であることが示された。さらに、理想的な自己像として、好奇心と向上心をもち、社会貢献、異文化交流の志向性が高く、社会への発信力を重視し、多文化理解態度も言語や文化学習、相手文化尊重、共同体意識などが必要だという学生像が示され、将来的には国際機関等での就職を考えていることが浮き彫りにされた。

このことは、新生が身近に日本社会のグローバル化について考えているとともに、国際社会の問題が日常的にマスメディアを通して報道され、高校生の考える進路選択にも海外留学、海外での職業選択が当たり前のように意識されている昨今の日本社会の現状を反映するものであろう。また、インターネットの普及により、お茶大のグローバル文化学環の情報にたやすくアクセスし、その教育内容を事前に確認した上で大学受験をし、将来を考慮した大学選択をしてから入学したものと考えられる。

また、グローバル文化学に関心を持つ学生は、本学の国際教育・キャリア育成プログラムに高い関心と期待を示すとともに、多文化理解態度も重要視しており、国際型キャリア志向であった。このことから、今後の教育面の課題となるのは、こうした明確な目的を持つ新生の期待を大学がどのように受け止め、それに応えられるかということである。国際意識の高い学生の期待はずれにならないような、国際的で実践的な、多様な教育及びキャリアプログラムの開発と提供、経験豊富な教育者の配置、卒業後の進路選択や指導を含む国内外の国際協力機関とのネットワーク構築など、多様なリソースの開発が求められるであろう。

特に、グローバル文化学に関連する学習意欲については、「さまざまな国や文化の理解」やそれとともに「日本や自文化を見つめること」、「いろいろな国の人と友達になること」が挙げられており、これらは、これまでのところ、グローバル文化学の地域研究や留学生と日本人学生の多文化間交流のプログラムで何とかカバーされている。しかし、「外国語で自由に討論できるようになりたい」という点については、単純に外国語を学ぶだけでなく、外国語をツールとして、自らの考えや意見を発信していく能力を向上させていく内容と技能を兼ね備えた言語習得と専門領域のプログラム開発も必要だと考えられる（注4）。また、「国際協力に必要な知識や技術を学びたい」という点についても同様で、国際協力に関しては、専門領域の知識だけでなく、技能、援助方策など総合的な問題解決能力の育成や事例研究などが行える実践領域が不可欠で、国際協力に関するカリキュラム開発は、今後、力を注いでいかなければならない大きな課題である。

今後、グローバル文化学に高い関心と期待を持った学生たちは、大学の提供する海外留学、キャンパス内での留学生と日本人学生との多文化交流活動や国際教育プログラム、開発途上国への知識や援助技能の習熟により、どのように多文化理解態度、理想的自己、キャリア志向を変化させていくのであろうか。学生たちがキャンパスの内外で誰とどのような接触をし、どのような影響を受けるかは予測し難いが、体験によっては自分や相手に対する認識が良好なものになるとは限らない。それ故、学生たちは、大学が提供する教育プログラムや多様な体験を経て、現実の自分とその能力を見つめ、どんな自分になりたいか、再

び進路を問い自分に向き合う時が来ると思われる。その時に将来へのキャリア志向と適性を再検討でき(箕浦,2005)、「国際型」、「自由型」だけではないキャリア選択の幅を広げられる「出口」を意識したグローバル文化学環の幅の広いプログラムづくりを目指していく必要がある。

一方、グローバル文化学への関心の低い学生については、関心を高めるためには、どのようにしたらよいのであろうか。国際教育・キャリアプログラム(企画行事や教育支援活動)の参加意欲については、「関心低群」、「関心中群」は、「海外型」プログラムより、「交流型」プログラムに参加意欲が高い傾向が見られた。このことから、より多くの学生にグローバル文化学、またはグローバル社会に関心を促すためには、より接近しやすく障壁の低い「交流型」のプログラムの開発と実践を大学内外で地道に進めていくことが重要であり、大学キャンパス内などの留学生交流・支援活動や異文化体験学習の場の提供が有効だと考える(注5)。こうした身近な交流型の異文化体験学習を進めることにより、国内における留学生との交流の楽しさ、多文化理解、海外留学への関心やグローバル社会への関心度が高まる可能性もあるのではないと思われる。このように、多様な交流型プログラム開発と提供は、学生全体の「大学の国際交流の底上げ」という意味で、より充実したものにしていく必要もある。

本調査は、お茶の水女子大学で初めて行った国際意識調査であるが、仮説検証型の明確な概念枠組みを設定することができなかつたため、探索的で多様な変数を用いることになってしまったことは否めない。したがって、今後の課題は、本調査で示した多様な要因、すなわち、国際教育・キャリアプログラムの参加意欲、理想的自己観、キャリア志向、多文化理解態度、社会イメージなどそれぞれの要因の関連をさらに検討し、全体を通しての学生像を示し、学生の期待と意識を明確にする必要がある。また、新入生の関心度がどのように変化していくか、また、すべての新入生に対するグローバル文化学の教育内容が学生たちの態度と意識にどのように効果をもたらすか、検証していくことが必要である。とりわけ、グローバル文化学環の立ち上げのこの1年間に関しては、1年生を対象にグローバル文化学の教育プログラムを履修した学生と履修しなかった学生の違いを分析することで、グローバル文化学の教育内容の評価を検討する資料の提供が可能となるであろう。

注

- (1) 2001年に発足した留学生センターは、2005年から国際教育センターに再編成された。また、2004年に語学センターが発足し、5週間の英語研修プログラムが2004年夏から始まり、単位互換制度が整備された。「女子教育を通しての国際協力」を実施可能な貢献領域と考え、2003年には開発途上国女子教育協力センターが発足し、さまざまな国際協力活動が実施されている。
- (2) 文教育学部のグローバル文化学環は、グローバル化する現代社会のなかで、さまざまな地域がどのように変わっていくのか、将来、国際協力や国際化するビジネス・学校教育・地域社会の場で活動するための知識と態度を育成することを目的にしている。
- (3) グローバル文化学環は3つの柱によりカリキュラムが編成されている。1つは、「地域社会・地域文化」で、アジア太平洋を中心としたさまざまな文化圏の地域の社会や文化の変化について取り上げる。2つめは、「多文化交流・多文化共生」で、国内外での多様な接触や交流が個人個人の行動にどのような影響を与えるか、心理的・言語的側面から検討する。3つめは「国際協力」で、経済、社会、文化の諸領域にわたり、国家レベルから民間のNGO、企業、個人レベルまで当該地域の価値観の違いを理解した上で協力方法を創造する。文教育学部4名及び国際教育センター2名の所属専任教員による構成で

スタートした。

- (4) ワシントン大学国際学部の教員招聘による英語での授業が2005年9月に2週間行われた。
- (5) 留学生支援については、20数年前から留学生相談室の院生チューターが留学生の学習、生活情報支援活動を行ってきている。また、2002年からはTEA (Transcultural Exchange Association) という学部生と留学生による国際交流グループも発足し、ランチミーティングや文化交流会など日常的で自発的な交流活動を行っている。国際教育センターでも2002年から2005年まで毎年、留学生と日本人学生の国際教育交流シンポジウム(交流合宿)など交流活動を継続して行っている(お茶の水女子大学留学生センター,2003など)。

参考文献

- アフガニスタン女子教育支援研究会(代表 箕浦康子) 2005 お茶の水女子大学1、2年生にみるキャリア志向:グローバル化社会および国際協力に関する意識調査報告書
- 加賀美常美代 2003 教育的介入が多文化理解態度におよぼす効果について-シミュレーションゲームと協働的活動の場合 異文化間教育学会第24回大会発表
- 加賀美常美代 2004 教育価値観の異文化間比較-日本人教師、中国人学生、韓国人学生、日本人学生との違い-異文化間教育 19, 67-84
- 箕浦康子・加賀美常美代・小柳志津・三浦徹・篠塚英子 2005 大学教育とキャリア形成-入学時と2年終了時のお茶の水女子大学生の調査から- 人文科学研究 第2巻 印刷中
- お茶の水女子大学留学生センター 2003 第1回 留学生と日本人学生のための国際教育交流シンポジウム報告書
- お茶の水女子大学留学生センター 2004 第2回 留学生と日本人学生のための国際教育交流シンポジウム報告書
- お茶の水女子大学留学生センター 2005 第3回 留学生と日本人学生のための国際教育交流シンポジウム報告書
- Pettigrew, T. F. 1998 Intergrup Contact Theory. Annual Review of Psychology, 49, 65-85
- Ruben, B.D. 1989 The Study of Cross-Cultural Competence: Traditions and Contemporary Issues. International Journal of Intercultural Relations,13, 229-240
- 山岸みどり 1997 異文化間リタラシーと異文化間能力 異文化間教育 11 37-51
- 八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美 2001 異文化コミュニケーション・ワークブック 三修社